

## 碑に込める私の思い

宇土市立網田中学校 2年 山崎 瀬里奈

「この災害を忘れることなく、親から子へと、この教訓を語り継いでいかねばなりません。」  
これは、熊本の心「碑に込められた願い」の中の最後の一文です。

この話は、今から227年前、雲仙普賢岳大噴火による「寛政の大津波」のときの出来事です。これにより、島原で1万人、肥後でも5千人に及ぶ死者がでました。

鹿子木村の役人であった鹿子木量平は、1万5千人に及ぶ犠牲者の霊を慰めるための供養塔の建立を命じました。そこには、「このような災害で二度と貴重な命が失われてはならない」という量平の強い思いが込められていたのです。

私は道徳でこの話を学習したときに、長崎の修学旅行で聞いた「島原大変、肥後迷惑」の言葉、さらに、祖母から聞いた「網田」の話思い出しました。

祖母によると、私が住んでいる網田もこの災害により、多くの犠牲者が出たそうです。特にひどかったのは、現在の網田の戸口区と長浜区です。戸口では535人、長浜では290人も人が亡くなりました。特に、戸口では当時800人余りの人口が、この災害により230人ほどに激減しました。3人に2人が亡くなったこととなります。そのため、私の家のすぐ近くにも、犠牲者の霊を慰める石碑が建てられています。

私が、初めて祖母からこの話を聞いたときは、まだ幼く、聞き流していました。しかし、小さい頃から折にふれ、何度も話してくれたので、この話は私の記憶に深く刻まれたのです。

私は授業で、石碑を建てた鹿子木量平の気持ちについて考えたときに、当時の網田の人たちも同じように「このような災害があったことを忘れない」、「この話を後世に伝えたい」と誓ったのだらうと思いました。

聞くところによると、祖母は、鹿子木量平という人のことは知らないそうです。しかし、祖母は知らない間に、量平と同じように孫である私に、当時の人の思いをしっかりとつないでいたのです。

3年前の熊本地震で、津波襲来の危険を知らせるサイレンが鳴り響いたとき、祖母の話が頭をよぎりました。そしてすぐに家族全員で高台に避難をしました。さらに2か月後の九州北部豪雨では、私の家は床下まで浸水しました。幸い家族は皆無事でしたが、いつでもどこにいても、身の回りには災害の危険が潜んでいることに気がきました。そして、改めて、日ごろから心構えをしておくことの大切さを実感しました。

今から227年前も前にあった出来事が、私たちの心に今もこうして刻まれているのは、たくさんの人々が語り継いでくださったおかげです。だから、私も、祖母やその前の代の方々の思いを語り継ぎ、かけがえのないたくさんの方々の命を守っていきたいです。